

手腕を労して運命を作為されんことを

松山義則

卒業生の皆さん。

あたたかい春のやわらかな日ざしを受ける頃となりました。同志社大学、および同志社女子大学での学生生活を終え、社会に門出されるときをむかえられました。心からおよろこびを申し上げます。

大学を卒業されることは、人生にとって大きな一つのふし目であり、いつまでも忘れられない事件であると思います。小学校、中学校、高等学校を経て、最終の学生生活を完成されました。この長い成長の間に、みなさんが各自獲得されたものは、なにもものにもかえがたい至宝のかずかずであったと思います。ことに、同志社の自由な学風のなかで、新島精神の清新な気風に接されましたが、これは卒業される方がたのひとりひとりの心のなかに生き、人生の歩みの力づよい指針となり、同志社人である自信にあふれさせたであり

ましよう。

現在、われわれがよく耳にしますことは、国際化、情報化、高齢化というようないまの時代の特徴を示す言葉であります。まことに、世界は相互の理解、協力、協調という国際化なしには人類の生存を全うすることができなくなりました。古い時代には隣国のことを知ることさえ困難でありましたし、自国で生産し消費する完結した単位のなかだけで生きることができました。そして、悠久の人類の歴史は、見方によっては対立した国同志の戦争のくりかえしの歴史でもありました。強い国が弱い国を力によって制覇することの反覆であり、強いものの考え方や主張が常に正義とされました。しかし、現在は、世界のすべての人びと、国ぐにが相互に理解しあい協力しあうことなしには地球上の人類の営みが成立しなくなっています。情報化ということも、科学技術の急速な発展にもなつて、人類のもつ知識が迅速に整理され記憶され、情報の利用が現実化しています。しかも、判断や感情、欲望までが情報技術のなかくみ入れられようとさえしています。いままでは、自分の目でものを見、見えるかぎりにおいて、はるかかなたの山もとらえることができました。耳の及ぶかぎりにおいて、遠い声を聞きとっていました。しかし望遠鏡や電信電話の機器道具の発達に加えて情報処理機構がくみ込まれ、情報は肥大化、精密化し、ときには誤情報に過度にさらされる状態さえ生じています。生命科学や環境科学の発達は高齢化社会の実現に寄与しましたが、高齢化社会の位置づけや価値づけには、解決されることなく、まだまだ数多くの深刻な問題を残しています。

また、現在、わたくしたちが耳にする言葉に、自由化、多様化といったものがありま

す。これは個性を尊重し重視することから主張されてきたものでありましょう。たしかに、人間にとって自由ほど大切な貴重なものではありません。人間の歩んできた歴史は、一方においては戦争のくりかえしでありましたが、また、自由を希求し、それを実現するための歴史でもありました。かたにはまった、硬直化した、その時代の権力がつくった一つの社会的目標のために、人間のすべてがくみこまれてしまった時代もありました。自由化、個性化、価値の多様化が論じられるということは、大切なことでありますが同時に、現在、なお、自由がなく、没个性的であり、価値の一边倒が存在し、いわゆる管理社会がのしかかっている現実があるからでもあります。

いま、社会の現実を示唆する特徴として、国際化、情報化、高齢化、あるいは自由化、多様化などのよく耳にする言葉をとりあげてみました。これらの言葉は耳に美しく聞こえるものでもありません。しかし、わたくしたちはなにごとにも静かに思慮ぶかくなければならないと思います。現在の特性を象徴するこれらの現象には鋭くとらえ分析すべき、二義性や多義性あるいは両面価値性があります。国際化についてみても、そこには国際性の甘いはなやかな国際人の交際だけではなく、国ぐいの利害の対立があり、その解決に生じる数多くの矛盾は苛酷なものがあります。国際化とは、それぞれの国家、文化を直ちに昇華して、国際性の名のもとに安易に統合することにはなりません。日本人は日本の文化を体得し深化することによって異文化と対処し、相互に理解し、相互に協力協調するという複雑にして苦難の道程を経てこそ、はじめてそこに国際化への道を見出すことができるのであります。昔、バベルの塔を建設し天に達しようと人びとは意欲したと言います。しかし

一夜にしてその浅はかな人間の知慧はやぶられ、バベルの塔はうちくだかれ、そこに集合した人びとはお互に理解しえないばらばらの離散した言葉を言い耳にしなければなりませんでした。国際化という美しい言葉には、このバベルの塔を再建しようという思いがあります。情報化や高齢化社会、あるいは、自由化や多様化にも同じような二義性、両価性をみおとすわけにはいけません。

わたくしたちは、二十一世紀に直前した国際社会のなかで明日の日に対して、人間としての責任ある人生の日々を歩みつけねばなりません。この複雑な、また未来の見通すことの困難な不透明な時代に生きている現実を忘れることはできません。われわれが、いま生きているという、厳粛な事実の前に立って、わたくしたちひとり、ひとりが、自己の人生において、自分にしかできない仕事に誠実にとりくみたいと思います。皆さんのこれからの日々には数多く試練や患難がおそいかかってくるでしょう。人間として正面から問題にとりくんで逃げることなく、一步一步解決の道を歩みたいと思います。

これから二十一世紀に向けて、そして二十一世紀において、皆さんはその人生をすごされることとなります。人間がいままで経験もしなかったような時代、社会に皆さんは直面し、そこで生活されることでしょう。どのような時代が来ても、そこには神の御意志がはたらいており、神の御業のあらわれであると信じてうごかない信念によりたいと思います。その世界において働き場をあたえられた人間として、新島先生の念願された、良心に生きる人物として生きたいと思えます。「自らの自個の手腕を労して、運命を作為するがごとき人物」として自己の人生を歩みたいと思えます。流水先を争わずという諺がありま

卒業生に贈る言葉

す。あの濤々として流れる大河は急ぐことなく争うことなく生きて流れています。人生には当然、思いもかけない苦難や失意のときがあります。しかし、あの流水のごとく悠然として、自己の手腕を労して、自己の世界をきり拓く人生を送って下さい。

卒業生のみなさまの御多幸を心から祈ります。

(同志社総長)

大いなる必然

木枝 燦

卒業生の皆さん、ご卒業まことにおめでとうございます。心からお慶びを申しあげます。

さて、これから皆さんの大部分の方方は同志社大学を卒業して職に就かれ、毎朝定時に出勤して与えられた職務を遂行されることとなります。その環境は学生時代とは全く違うでしょうが、また一方では遅刻をしてはいけないとか、学業に代わって今度は職務に精励しなければならぬとか、今までと大して変わらない点も多々あることでしょう。大切なことは、皆さんは新島襄先生の教え児であるという、同志社卒業生としての矜持を保ち続けて頂くことであります。

およそ生命あるもののうち、人間に生まれてくる確率は極めて小さいものです。現在の宇宙の成り立ち、太陽系の様相、地球の存在、その上の極東の小さな島々からなる日本の国土、その社会、その中であなたの存在、という風に考えてみると、すべて偶然のなす業であって、こんな事を考えること自体がいわゆる「愚者の考え休むに似たり」と一蹴されるべきことかも知れません。

しかし、一方では「愚者も千慮に一得あり」と申します。愚者に対比する言葉は賢者ですが、世の中に賢者といわれる程の人はそう多くはないでしょう。賢者というのは一つの理想化された幻想に過ぎないとすれば、われわれはほとんど皆が愚者といっても過言ではないでしょう。自己のまことに小さな、かつ偶然的な存在に思いをいたす時、そのありようの不思議さと驚きに愕然とし、それを契機に自省することもまた愚者の一得ではないでしょうか。

さいころを振ってどの目がでるか、小さな紙片をひらひら落とすと何処に落ちるか、それらは力学の法則に従う現象ですから理論的には計算できる筈のものです。しかしこんな

小さな出来事でさえ現在のわれわれには計算によって一意的に決定することはできず、三の目が出たのは偶然的だと考えます。しかしながらその見えない底、手の届かぬ所では力学の法則という必然が働いているのです。さいころや紙切りに比べればるかに複雑な人間という生命体に思いを致せば、あなたの存在もまた人間の思惟を遙かに越えたまことに不思議なものであり、単に偶然とか運命とかいう言葉では律し切れない意義深い存在であると言わねばなりません。

話が唐突になりますが、縄文人はどこから来たかという問いに対して、イヌの血液を調べることにより問題を考察するという方法があります。ヒトとイヌとは実に古い友達であり、縄文人はイヌを連れてこの島国にやって来て共同生活をしたのですから、純血種のイヌの分布を血液分析から決定することによってその共同生活者であるヒトの分布の歴史をたどることができます。この例から分かるように、ヒトは一属一種で生物学的にはお互いに極めてよく似ているとはいえ、その血液には遺伝を通じての多くの情報、すなわち個人個人がもつ誕生の瞬間までの歴史を含んでおります。換言すれば一個人を祖先の方に遡ってたどれば、そこにもまた必然的な何かがあるように思われます。

あなたは生まれ落ちたその時にすでに目に見えぬ無数の先祖の人人の歴史を背負い、以来それに育まれて現在まで学習によって知識と経験を貯え、理性による判断力とそれに基づく決断と実行の意志の力を養ってこられました。そのあなたは、同志社に入学されたことが仮に偶然であったとしても、同志社で過ごされた年月が単に偶然とか運命とかいう逃避的な消極性に埋没させることはできない特別な意義をもつ時間であったとお考え頂きた

いのです。あなたは今同志社大学を卒業して行かれますが、そのことに、目には見えませんが、言葉では尽くせない一つの大きな必然を、すなわち摂理をお汲み取り頂きたいと存じます。

新島先生が私学同志社を興そうとされた時のお考えを忖度することは、わたくし如きになしうることではありません。しかしそれを敢えてすることをお許し頂くならば、キリスト教をもって徳育の基本とするということには、上に述べたことも含まれていたと思います。すなわち、人がこれはという重要な考察、判断、決意、実行を迫られるとき、それらは大いなる必然に沿うようになさなければならないこと、そして人の行為は目には見えず手にも触れず、かつまた言葉には表わされないけれども、その必然の延長上に記録されて限りなく波及して見えざる歴史に残されていくこと、そのことを若い人達に自覚して欲しいということではなかったでしょうか。

わたくし自身の個人的な未熟な考えを舌足らずの文章によって、ご卒業の喜びの中にある皆様にお伝えするのはまことに恥しいことですがお許し頂きたいと存じます。しかし同志社のもつこの厳しさを知ることが新島先生の教え児としての矜持であると存じます。

(同志社大学長)

豊かな精神力を

岡野久二

二十世紀が終末期を迎え、二十一世紀の足音がぼつぼつ聞える頃となって参りましたが、今春学窓を巣立つ学生諸君は難しい時代に実社会での生活を始めることとなります。現代は激動期とか転換期とか言われていますが、過去の歴史の流れの中で私たちが経験したことのないような不透明な時代を迎えています。政治的に見れば、戦後四十年以上が過ぎ、世界の地図は大きく塗り替えられ、米ソ対立の構造にも変化が見られ、わが国も敗戦直後には想像も出来なかった程の国力を貯え、民主国家群の中軸をなしています。更に、その経済的繁栄は目を見張らせるものがあります。また、他方では、科学技術の急激な進歩発達は産業構造に大きな変化をもたらし、生活様式にも影響を与え、私たちの生き方そのものまで変える気配があります。科学技術の発達は今後の人間生活に何をもたらし、どんな変更を強いることになるのか、想像もできないというのが実情であります。現代と明日の時代を見通し、支配する新しい思想はまだ現われていません。転換期の不透明な状

態が今も続いています。しかし、人人は新しい革袋に入れるべき新しい酒、すなわち、新しい時代に適応する新しい思想、新しい人生観を模索しています。そして、知識人たちは、それぞれの専門を通して、時代の本質を見極め、明日の時代をリードする思想を構築する努力を続けています。その一例として、堺屋太一氏の「知価革命」（一九八五年十二月、PHP研究所発行）を挙げることができます。堺屋氏は、現在世の中が迎えている大きな変革期の後に出現するであろう社会について相反する二つの見方があると指摘して、「その第一は科学技術や産業組織がさらに発展・高度化する結果、『高度技術社会』あるいは『高度産業社会』と呼ぶべき世の中ができるだろうというものであり、その第二は、科学技術や産業組織の変化・変質によって、これまでとは違った世の中が生れるだろうという主張である」（二七頁）と述べ、「高度産業社会」論よりは、「新社会」論の立場から「工業社会の次の社会」を歴史的に予測し、そこでの社会的枠組みや社会規範を探り出そうと試みています。そして、その「新社会」とは「知価社会」だと考えています。「知価」とは耳なれぬ言葉ですが著者は次のように書いています。「これからは『知恵』の豊富な時代になる。従って、これからの社会では『知恵』を沢山使うライフスタイルが尊敬され、『知恵の値打ち』を多く含んだ商品がよく売れるようになるだろう。私が、次の社会を『知恵の値打ちが支配的になる社会』すなわち『知価社会』と想定するのはこのためである。」（六〇頁）著者が主張しているのは、これまで例外的、偶発的だった「知価」が一般的、普遍的になり、大量生産を前提とする工業社会が、多量生産の「知価社会」に変わり、それにともなって「支配的な経済原理」であり「社会規範」であった「一物一価の法則」が無くなり、世の中全体も根本的に変る、ということであり、

この「知価社会」論の評価は難しいが、ぼう大な物資の洪水によって生み出された現代文明が、

「物から精神」へと変化してゆくことは容易に想像されることであり、また、それは歴史の必然とも言えます。経済的な豊かさより心の豊かさを求める時代の到来、すなわち、「高度産業社会」から「精神社会」への回帰であります。「高度産業社会」では、選択もできない程の物資の洪水、科学技術の革新による多様な手段の出現によって、人間が主体性を喪失しかけていたと言いうことができるのですが、それが、「知恵の値打ちが支配的になる社会」、すなわち「知価社会」へと変ったとしても、私たちは物を見る目、本質をしっかりと把握する目を持っている必要があります。

聖書は、「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである」(Ⅱコリント四・一八)と説いています。目前の形の有る物にばかり心を奪われるのではなく、目に見えない物に目を注ぐべきであるという、この教えは信仰の本質を説いたものでありますが、見えない物の中に永遠性が存在するという考え方は、これからの「新社会」にあっても重要であります。物質文明の最盛期であるだけに一層精神の重要性、心の大切さを重視しなければなりません。豊かな物資に支えられた文明は瞬時的、即物的であり、永続性がありませんが、豊かな精神を内包した文明は永遠性をもっています。校祖新島襄は、国禁を犯して函館より出帆することができたことを回顧して、「私をしてかくも敢て大胆ならしめたものは、実に神の見えざる御手必ず我を導き給うことを信ずるの一念があつたからである」と述べておられますが、この精神的な強さが、今後の社会においては要求されるのではないのでしょうか。キリスト教主義が血となり肉となつている同志社の卒業生諸君には、見えざる物を見、その中に永遠性を見出す生き方は充分可能なことと信じています。激動する不透明な社会にあつて、豊かな精神力を養い、雄々しく生き、社会のために活躍されるよう祈っています。

(同志社女子大学長)